

# 1年生から学ぶ文章の型

平成29年告示の小学校学習指導要領では、「読むこと」の学習過程の中に、「構造と内容の把握」が示されました。説明文の学習において、文章全体から大事なところを見つけ、要旨をまとめることは高学年で行われる重要な内容です。従来、このような学習は高学年の授業で扱う内容と考えられ、実践されてきましたが、文章全体から大事なところを見つけることは、教材の文章がシンプルで短い低学年のうちから学習していくことが大切です。

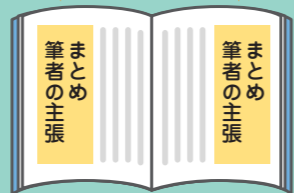
基本的に小学校の説明文の中で、大事なところが書かれているのは、文章の最初か最後、もしくはその両方、という3パターンであることが多く見られます。大事なところが最初に書かれているのは頭括型、最後に書かれているのは尾括型、両方に書かれているのは双括型とよく呼ばれています。低学年のうちから文章の構造を意識して読むことは大切ですが、このような用語を使っても、子どもたちに文章の構成をイメージさせることは難しいものです。それでは、どのような方法が考えられるでしょう。発達段階に合った言葉を示し、文章の構造をイメージできるようにすることが有効です。例えば、私の担当していた1年生の学級では、頭括型は「あたま型」、尾括型は「おしり型」や「しっぽ型」、双括型は「サンドイッチ型」と名づけました。



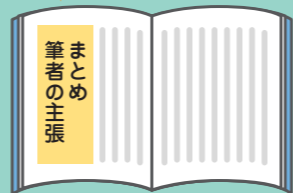
頭括型 (あたま型)



双括型 (サンドイッチ型)



尾括型 (おしり型・しっぽ型)



昭和学院小学校 校長  
あおき のぶ お  
青木 伸生



このように名づけることで、低学年から文章の構造をイメージし、大事なところがどこに書かれているかを意識できるようになります。

教育出版の1年生の説明文では、頭括型を『はたらく じどう車』で、尾括型を『すずめの くらし』と『だれが、たべたのでしょうか』で、双括型を『みぶりで つたえる』で扱っています。小学校6年間で学ぶ説明文の三つの型を、1年生の段階から学ぶことができます。そのため、学年が上がり、長く複雑な文章になっても、大事なところがどこに書かれているのかを考えながら読むことができます。

また、説明文の型を学ぶことによって、「読むこと」だけでなく他領域にも学びを生かすことができます。例えば、紹介したい話を頭括型で話してみたり、運動会のできごとを尾括型で書いてみたりすることができます。さらに、ふだんの日記や観察カードなどさまざまな表現でも使えるので、他教科に発展させることもできるのです。

Vol. 13

小学国語通信

教育出版

# ことばだより KOTOBADAYORI



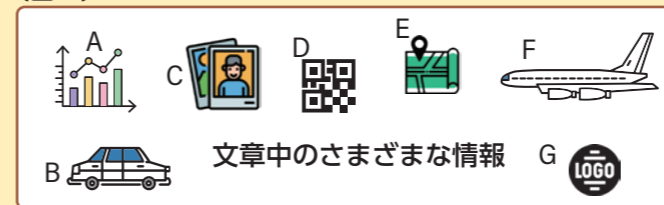
立正大学 講師  
かんばやし てっぺい  
神林 哲平

## マルチモーダル時代の情報の扱い方 — 説明文の学習を通して —

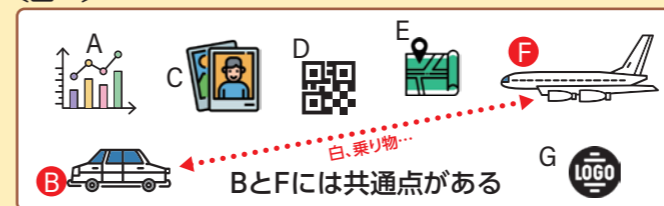
### 1. 「情報の扱い方」とは

現行の学習指導要領から新設された「情報の扱い方に関する事項」。この事項は「知識及び技能」に位置づけられ、資質・能力を育成することで話や文章の正確な理解（インプット）、適切な表現（アウトプット）につながるといわれています。皆さんは、この事項についてどのようなイメージをおもちでしょうか。本稿では、その内容について図を用いて視覚的に伝えするとともに、今の時代に求められる情報の適切な扱い方にふれます。

〔図1〕



〔図2〕



「情報の扱い方に関する事項」の内容は、ア「情報と情報との関係」、イ「情報の整理」の二つで構成されています。図1の四角内のA~Gは、文章中のさまざまな情報のイメージです。ここでの情報には、言葉はもちろん、写真や挿絵、グラフなどの図表が含まれます。そうした多様な情報から、特定のもの(BとFの共通点)をピックアップし、関係づけるという流れが、図1と2の間にある矢印(▼)と図2にあたります。指導事項との関連でいえば、図2がア「情報と情報との関係」、矢印(▼)がイ「情報の整理」となります。

具体例をあげましょう。「乗り物には、いろいろな

マルチモーダル・テキストとは  
文字言語だけではなく、図表や画像、音声といった異なるメディアを組み合わせて作成されたテキストのこと。

種類があります。例えば、5人乗りの白い車があります。スピードの出る白い飛行機もあります。」といった文章から、低学年のAで示されている「共通」と「相違」に着目します。すると、「共通」は「白い」、「相違」は「乗り物の種類」という情報と情報との関係が見いだせるでしょう。低学年ではイは示されていないため意識させる必要はありませんが、ここでは中学年のイ「比較」を用いて、情報を整理しているということになります。このようにして、アとイを駆使しながら情報を扱っていくのです。

### 2. マルチモーダル時代の情報の使い手に

近年、国語教育では「マルチモーダル・テキスト」という言葉が出てきています。文字言語だけではなく、図表や画像、音声といった異なるメディアを組み合わせで作成されたテキストのことです。そうした情報には、大人よりも子どものほうが慣れていられるかもしれません。一方、その情報の適切な扱い方については、大人である教師が系統性をもって指導していく必要があります。この次のページには、2年生の説明文『ジャンプロケットを作ろう』の実践事例が掲載されています。この説明文教材には、文章中の事柄の順序を表す言葉に加え、画像や二次元コードを読み取ることによる動画での説明、学習の手引きで作成する表などを含んでおり、まさにマルチモーダル・テキストです。情報の扱い方を指導していくにあたって格好の教材であるといえるでしょう。

低学年から適切な情報の扱い方を学び、系統的に積み重ねることで、高学年では図を用いて因果関係などの情報を捉えられるようになります。マルチモーダル時代に求められる情報の使い手を育てたいものです。



# 「説明書」を読む授業づくりのポイント

## -(二下)『ジャンプロケットを作ろう』の授業を通して-



筑波大学附属小学校 教諭  
むかえ ゆか  
迎 有果

### 1. 説明的文章の読みまちはどこにあるのか

説明的文章には報告文、記録文、紹介文などさまざまな種類があり、それぞれに特徴があります。ここでは、おもちゃの作り方の「説明書」を読む際に起こる「読みまちはいい」について考えていきます。

作り方を説明する文では、用意するものや手順を正確に読む力が必要になります。教育出版の教科書では、内容を理解した後、『おもちゃのせつめい書を書こう』につなげるのですが、経験上、児童は、おもちゃの作り方の説明書を「読んでいる」と思っているが実は「読めていない」ことも少なくありません。これは、以下の二つの工夫を読み取る際に、両者を区別せずに読んでいることに起因します。

#### 1 おもちゃ作りの工夫

作り方の工夫、遊び方の工夫

#### 2 説明のための工夫

表現方法の工夫、文章構成の工夫

そのため、これらを区別して読むことができるようにはたらきかける必要があります。

### 2. 説明文(二下)『ジャンプロケットを作ろう』授業づくりのポイント

令和6年度版から掲載された新教材です。紙コップで作るロケットは、2年生の児童にとってなじみのあるおもちゃの一つであるといえます。紙コップ2個と輪ゴム2本があれば基本の形を作ることができ、失敗も少ないです。画用紙やペンを使って、工夫を加えることもできます。文章中には書かれていませんが、輪ゴムを増やす、輪ゴムを太くする、紙コップの大きさを変えるなど、まだまだ工夫の余地はあるでしょう。生活科でどのようにおもちゃを作っていたのかを想起させることで、意欲的に読むことができる説明文です。このようなことを踏まえ、学習計画を立てました。

- ① おもちゃの説明書に必要なことは何か考える。
- ② 内容の大体を思考ツールにまとめる。
- ③ 作り方一・二、あそび方を分けて、内容をワークシートにまとめ、思考を整理する。
- ④ 学習を振り返る。

おもちゃ作りの経験を想起し、説明書を書いてから、教科書本文と比べてみるのも一つの方法でしょう。学習計画は学級の実態に合わせて柔軟に設定していきたいところです。

以下、二つの視点から『ジャンプロケットを作ろう』の授業においてポイントとなった点を示します。

#### (1) 説明の工夫を見つける

扉ページにある「説明の工夫」とは何かを問いかね、学習の見通しをもたせることが大切です。

第1時では、本文を読んで説明の工夫を見つけました。

#### 文章構成

見出しがある。

「一」「二」と番号がある。

「まず」「つぎに」という順序を表す言葉がある。

#### 文章内容

例がある。

身のまわりにある物を使っている。

用意するものがわかりやすい。

細かく書いてある。

うまく作る方法が書いてある。

注意することが書いてある。

簡単な方法で書いてある。

長さが書いてある。

#### 写真の工夫

作ることが難しいところに写真がある。

動画で動きがわかる。

矢印がある。

本文の中に「三ミリメートルほどの切りこみ」を入れることを説明している文章があります。3ミリメートルといっても、長さの感覚がそれほど豊かになっていない児童が、定規を使わずに長さをイメージできるでしょうか。それぞれ指を使って長さを示させると、紙コップの大きさを見ながら見当をつけた児童がいる一方で、5センチメートルに近い長さを示した児童もいました。それに対して、「もっと少しだけなんじゃない」と発言があり、「ほど」の意味にこだわりながら言葉をイメージする様子が見られました。指で示してイメージを共有した後、実際に切ってみると、切り込みが深くなりすぎて紙コップの側面が弱くなり、高く跳ばすことができない児童もいました。「長すぎるんじゃない」「長さは大切な言葉だ」と実感を持って読む様子が見られました。また、定規を紙コップに合わせて、印をつけてからやってみる児童も見られ、『おもちゃのせつめい書を書こう』の学習への意識づけにつながりました。さらに、「少し切っておいて、できなかったらもう少し切ればいい」という発言もあり、試行錯誤の様子も見られました。このような発言を価値づけ、つなげていくことで、言葉に立ち止まって読む児童が増えていきます。

児童はその他に「注意すること」に注目して読んでいました。おもちゃ作りを成功させるために、曖昧にしてはいけない事柄の一つとして捉えているようです。説明書の読みでは、児童の感じたことや言葉を共有し、気づきを促していきます。また、文章構成を読みまちはえずに、どの言葉を大切に読むかが問われます。説明文の読みの学習の入り口として大切にしていきます。

#### (2) 学習を積み重ねる

##### ① 説明文の学びをつなげる

順序を表す言葉については、これまでの説明文で学んできています。種類が異なる説明文の文章を読むことで、スパイラルなかたちで学びを積み重ねることが大切です。説明文『さげが大きくなるまで』では、「そして」「やがて」を確認しました。時を表す言葉が順序を示す方法として書かれているために「やがて」が入っていますが、おもちゃの作り方の説明には合わない表現です。説明文によって活用できる接続語は異なり、さまざまな説明文を読むことで学びが積み重なっていきます。

生活科ではおもちゃを作ってきた経験があります。おもちゃの工夫として扱った「数・大きさ・材料・デザイン・遊び方」などを示した掲示物を用意し、教材文との結びつきを意識させるようにします。

##### ② 思考ツールを活用する

学習の手引きのページには、表で整理する方法を示しています。表でまとめる方法も有効ではありますが、思考ツールを用いて考えを整理する方法もあります。表で整理するよりも自由度が高く、工夫して書いている様子が見られます。特に、思考の可視化という点で有効でしょう。

Xチャートに、「材料・使う道具・遊び方・注意すること」を分けて書き込み、内容を整理しました。



表を使って整理する場合、決まった欄の一つ一つに一定の文言を入れていくことが求められます。一方、思考ツールはもっと広く捉えることができ、自由度が生まれます。自由に書いてから表に整理することで、順序を正確に読むことの大切さに気づくことができます。表にまとめる前段階として、思考を柔らかくすることも必要と考えました。

また、Xチャートに書き込んだ内容は、次の学習『おもちゃのせつめい書を書こう』につながります。同じ思考ツールを用いることで、本教材で学んだことを書く学習活動に生かすことができます。

思考ツールに書き込むときには、「色を用いる」「矢印でつなげる」といった工夫が見られました。児童の考えた工夫は適宜学級全体へ伝えることで、よいモデルとなり、学級全体の学習意欲や学び方が高まっていきます。

### 3. 終わりに

説明文を読むときには、児童に新しいことを知りたい、もっとわかりたいという気持ちをもたせることが大きな意味をもちます。言葉を大切に読んで読むためにも、児童の声に耳を傾けて、どの部分に引っかかるのかを考えながら学習計画を立てていくようにしたいものです。

